

野村篁園の詞集『秋篷笛譜』について

陳 竺 慧

はじめに

「詞」は「詩」と同様に中國の傳統的な韻文の一つであり、中國文學史において重要な地位を占める。日本では古くから漢字および漢文を取り入れてきたものの、「詞」はほとんど注目を受けないままであった。⁽¹⁾それは、同じく詩歌文學に屬する漢詩の目覺ましい發展と較べると、雲泥の差と言えよう。

しかし、この状況は江戸時代に入ると、一定の變化が起る。最も顯著な違いは作品數である。それまでの作者は生涯に多くとも數首程度の詞しか殘さなかつたが、江戸時代に入ると、徳川光圀を嚆矢として、三十首以上の詞を殘した作者が一氣に五指に餘るまでになった。⁽²⁾さらに、詩とは別にもつばら詞のみを収めた集を殘した作者も現れた。

たとえば田能村竹田には『秋聲館集』『清麗集』『竹田布衣詞』がある。田能村竹田は京阪、山陽等、主として西日本において活躍した。⁽³⁾これとほぼ同時期に、江戸においてひとり氣を吐いたのが、本稿で採り上げる野村篁園その人である。

野村篁園（一七七五—一八四三）、名は直温、字は君玉、通稱兵藏。篁園、西莊、霽莊、玉松山叟、紫芝山樵、淡湖漁叟、または靜宜軒などと號した。篁園は古賀精里に學び、昌平饗（昌平坂學問所）の教授を務めた。⁽⁴⁾彼は一生の間に百六十六首もの詞を殘しており、そのすべてが彼の詞集『秋篷笛譜』に收められている。彼の詞は、量的にも質的にも、江戸時代において突出しているが、これまで彼の詞について専門的に深く研究した論文は存在せず、管見の限りでは、神田喜一郎が『日本填詞史話』（二玄社、一九六五年）

の中で紹介しているのがほとんど唯一の先驅的言及であった。そこで本稿では、野村篁園の詞集『秋篷笛譜』を取り上げ、日本詞史において大きな足跡を遺した篁園の詞業について、主として文献學的側面からその概略を描き出すことを第一の目的とする。⁽⁵⁾

一、書名について

『秋篷笛譜』は篁園自身が編纂したものであるが、上梓刊行された形跡はなく、寫本の形で今日まで伝えられてきた。その集に『秋篷笛譜』と題した理由については、彼の詩文別集『篁園全集』(内閣文庫本)を繕いても、關連の言及は一切なく、推測するよりほかない。

「篷」は茅や布などで作られ、家屋の屋根や船、車などを覆うものであるが、詩詞において「秋」と「篷」とを同時に使用される時には、おおむね舟の覆いの意として使われる。たとえば「篷雨延鄉夢、江風阻暮秋」(唐・杜牧)「篷聲漁叟雨、葦色鷺鷥秋」(唐・鄭谷)「釣船篷底眠秋雨、誰遣南柯入夢中」(宋・孫觀)などである。また、「秋篷」を一つの言葉として使う作品に「持鞭又逐風塵去、却憶秋篷聽雨眠」(宋・嚴粲)「横笛秋篷底、銜山夕照殘」(宋・

趙汝鏞⁽¹⁾)などがある。「秋」と「篷」は、詩詞において主に秋の夜に雨粒が篷船に落ちる音を聞き、旅の寂しさや離別を悲しむイメージがある。送別や行旅の作品に見受けられることが多く、「漁夫」「漁叟」「釣翁」などと同時に使われる頻度も高い。

しかし、篁園はといえば、生まれも育ちも江戸であり、江戸を遠く離れて旅をしたこともなく、生涯をほぼ順調に儒官として過ごしている。作品の中にもその由来に當たる句は見當たらない。篁園は「秋篷」に含まれる旅や離別な

圖一 『秋篷笛譜』(『篁園全集』卷六所收、内閣文庫所藏)



どの場面からではなく、「秋蓬」という詩語が與える風景と音聲のイメージから自分の詞集に名付けたではないかと考えられる。それが自分の作る詞にふさわしいと考えてのことなのであろう。この詞集の作者名として「淡湖漁叟」という號を名乗っているのも、これを意識してのことであると考えられる。

「笛譜」は詞集の別稱の一つである。笛譜をもって詞集に題するものに宋の周密（二二三二—二九八）の『蘋洲漁笛譜』がある。周密、字は公謹、號は草窗、南宋雅詞派の中心人物の一人である。篁園は、あるいはその影響をうけて笛譜と名付けたかもしれない。他に清の凌廷堪（二七五七—一八〇九）に『梅邊吹笛譜』（二八〇〇）があり、これは姜白石の詞「暗香」から名付けたという²⁸。姜白石（二一五五—一二二二）、名は夔、字は堯章、號は白石道人、南宋雅詞の代表的な作家の一人である。その「暗香」は姜白石の自度曲である。凌廷堪は樂律に精通し、篁園とはほぼ同時代の人である。篁園が實際にこれを目にしたかどうか定かで無いが、「笛譜」と名付けたのは當時の清代學者と同じように詞の音樂性を強く意識してのことではなかったかと考えられる。

「秋蓬」「笛譜」「淡湖」「漁叟」、これらの言葉を全部合わせてみると、水が澄んで静かな秋の湖に一人の漁夫が篷船に乗り、小雨の中に氣ままに笛を吹いたり歌ったりして風景が浮かんできく。喧騒な俗世から離れ、名も知らぬ漁夫となり、秋雨が船の屋根に打つ音を聞き、悠然と音樂と釣りを楽しむのは、篁園が描いた理想な境地であるのだらう。そしてこうした語彙によつて喚起される「淡雅」「枯淡」のイメージは、まさに篁園が「詩餘」の文學に求めていたものであったのではないかと推測される。

二、填詞の時期について

『秋蓬笛譜』に收められている全百六十六首の詞のうち、詞題からはつきりと年月日まで確定できるのは、第六十五首の「拜星月慢」^{乙未閏七夕同梅龕賦}（『篁園全集』卷六）と第四十首の「慶春澤」^{丁酉元日}（『篁園全集』卷七）だけである。

「拜星月慢」^{乙未閏七夕同梅龕賦}は天保六年（一八三五）、篁園六十一歳の作である。梅龕とは篁園の弟子の一人日下部夢香（？—一八六三）の號である。その年は閏七月であり、最初の七月七日は大雨のために星が見られなかったが、閏七月の七日には晴れたという。

「慶春澤^{丁酉元日}」は天保八年（一八三七）の一月一日、篁園六十三歳の作である。その日篁園は微恙のため、朝賀に参加できなかつたので、そのことについて心情を述べた。

これ以外の作品は時期を特定する材料が少ないが、詞題と本文に含まれる季節や節日の描寫などを総合して推測すると、『秋篷笛譜』は年月を追って編纂されたものと見られる。たとえば、第三首から第五首までの詞題は「夏日永峰別業招集」「謝人贈枇杷」「初夏借遊谷墅二首」であり、夏の作品だとわかる。第二十一首の詞題「中秋梅巖蒼湖枉過、詞以誌喜。用坡老韻」、第二十二首の詞題「觀楓」、第二十七首の詞題「九日登高」は秋の作品だとわかる。次に第三十首の詞題は「雪水煮茶」、第三十五首は「暮春書感」、第三十六首は「櫻花」と冬から春に、そして第四十三首の詞題「觀競渡」、第四十八首の詞題「夏日游墨水醜酬精舍」などから季節が一巡りしたことがわかる。いつ作られたのか判定しにくい題畫・詠物などを除いてみると、贈答・游賞など日常を記した詞はおおよそ時間順通りである。前述の第六十五首の「拜星月慢^{乙未閏七夕 同梅鼎賦}」と第四百四十首の「慶春澤^{丁酉元日}」の間に配置された作品も同じく時間順となっており、これらの詞は篁園六十一歳から六十

三歳の間に作られたと考えられる。

また、『秋篷笛譜』に收められた「浪淘沙^{題畫}」（第八首）と「賣花聲^{春興}」（第五十二首）は彼の詩詞集である『靜宜慚藁』（篁園全集 卷一―卷四）の卷二にも重複して收められている。篁園は『靜宜慚藁』の卷二を編纂する時點はまだ詩と詞をわけておらず、單獨に詞集を編纂する豫定のなかつた可能性が高いだろう。

表一は『靜宜慚藁』の詩題から制作年を推定できる詩の一覽である。詩集に登場するすべての人物を特定することはできないが、それでも詩題と内容から『靜宜慚藁』はおおよそ作品の制作された年月順通りに編纂されたと言えるだろう。

この兩方を照らし合わせると、「浪淘沙^{題畫}」と「賣花聲^{春興}」はともに『靜宜慚藁』の卷二に收められた「甲申上元樂庵主人六十初度、贈七言長律二十韻爲壽」の後、「己丑孟夏借賞林氏谷墅、探得寒字二首」の前に配置されている。甲申は一八二四年（篁園五十歳）、己丑は一八二九年（篁園五十五歳）である。假に「浪淘沙^{題畫}」と「賣花聲^{春興}」が制作年にしたがって順に『靜宜慚藁』に收められているとすれば、『秋篷笛譜』の第八首から第五十二首までは篁園五十歳から五十五歳の間の作品ということになる。

表一 『靜宜慚藁』所収の作品の中に制作された年を確定できる「詩」

静宜慚藁	卷一	卷二	卷四
詩題（原本順）	送精里先生赴馬島接韓史 ^①	送嶋公倫應橋藩聘宰遠之相良二首 ^②	追輓田半齋竝序 ^③
和暦	文化八年	文政五年	天保三年
西暦	一八一—	一八二—	一八三—
簗園の年齢	三十七歳	四十八歳	五十八歳
	悼空空翁三韻 ^④	甲申上元樂庵主人六十賞林氏谷墅長律二十韻首	觀琉史入都 ^⑤
	文化九年	文政七年	天保三年
	文化十四年	文政十二年	
	文政二年	文政十二年	
	一八一—	一八二—	一八三—
	一八一—	一八二—	一八三—
	四十三歳	五十歳	五十八歳
	四十五歳	五十五歳	五十八歳
	已卯中秋月蝕	探得寒字二首	

(a) 精里先生は古賀精里（一七五〇—一八一七）を指す。古賀精里が對馬に行き、朝鮮通信使を迎えたのは文化八年のことなので、簗園のこの詩はその年に作られたと推測される。

(b) 空空翁、本姓は兒玉、通稱は喜太郎、名は愼、字は默甫。文化九年七月二十一日歿。簗園の詩はこの頃に作られたと思われる。徳田武「簗園詩注釋二首——悼空空翁三十韻」「精里先生挽詩六十八韻——」（『江戸漢學の世界』、ぺりかん社、一九九〇年）に詳しい。

(c) 古賀精里の歿年は一八一七年なので、簗園の詩はその年に作られたと考えられる。（同前注）

(d) 嶋公倫は小島蕉園（一七七一—一八二六）のこと指す。文政五年四月、小島蕉園が遠州に赴任した際にこの詩が

作られたと考えられる。森銚三「小島蕉園」（『森銚三著作集』卷八、中央公論社、一九七一年）を参照。

(e) 田半齋は勝田半齋（一七八〇—一八三一）を指している。簗園の序文に「辛卯重陽後一日、友人田半齋歿矣。余欲裁詩哭之、而眼枯腸斷、遂不能成隻辭。轉瞬間荏苒一期、痛亦稍定、回賦長律二十六韻、以供祥奠併寓追悼之意。」とあることから、簗園は傷心過度のため、翌年によくこの詩を作ることができたことがわかる。

(f) 簗園の生涯において琉球使節が江戸上りを行った回数全部で五回あるが、簗園の年齢と時間から推測するにここは一八三二年が妥当であろう。

	詞牌（他に使われた別名）	數量（比率）↓連作除外	小令（58字）／中調（59～90字）／長調（91字）
①	念奴嬌（百字令、壺中天、酹江月、百字謠、淮甸春、念奴嬌、壺中天慢、賽天香）	14 (8.4%)	長調
②	漁歌子（漁家子）	7 (4.2%) ↓4	小令
③	好事近（釣船笛）	5 (3%) ↓1	小令
④	水龍吟	4 (2.4%)	長調
⑤	臨江仙（臨江山）	4 (2.4%)	小令
⑥	點絳脣	3 (1.8%)	小令
⑦	滿江紅	3 (1.8%) ↓2	長調
⑧	沁園春	3 (1.8%)	長調
⑨	摸魚兒（摸魚子、邁陂塘）	3 (1.8%)	長調
⑩	齊天樂（如此江山、臺城路）	3 (1.8%)	長調
⑪	行香子	3 (1.8%)	中調
⑫	疎影	3 (1.8%)	長調
⑬	菩薩蠻（菩薩蠻）	3 (1.8%) ↓2	小令
⑭	鷓鴣天	3 (1.8%) ↓1	小令

表二 野村篁園が使用した詞牌について（1～2首以下省略）

以上をまとめると、『秋篷笛譜』の大部分は中晩年、特に五十代から六〇代の作品であると推測される。

三、詞牌の種類について

篁園が填詞にあたって使用した詞牌について、まず指

摘すべきはその種類の多様さである。『秋篷笛譜』の中で使われた詞牌は全部で一〇三種にのぼる。^④ 字数の少ない小令（「荷葉令」「南歌子」など）から、最長と言われる長調（「鶯啼序」）まで多岐にわたり、表二のように、「念奴嬌」や「漁歌子」「好事近」などを除けば、他はほとんどが一

回のみ用いられた詞牌で、その数が七十三種に及ぶ。それと、「其二」「其三」などの連作を除くと、小令の詞牌が繰り返しに使用される回数は目に見えて減る。たとえば「漁歌子」「好事近」が表二では第二位と第三位だったが、連作を除くとそれぞれ四首、一首となる。その代わりに、長調の多作が目立ってくる。小令より長調の方が填詞の困難さは増すので、篁園が填詞に對して極めて意欲的であったこと、また填詞に本格的に取り組もうとしていたことを物語っている。

特に「鶯啼序」という詞牌は二百四十字もあり、長さによって前後四段の文脈の繋がりが散漫になりやすく、他に句の構造も韻の踏み方も高いレベルの作詞能力を必要とされ、長調の中でも一番難しいと言われているものである¹⁵。歴代の詞人たちがこの詞牌を試みるのは己の填詞能力を示せる意味合いがあった。篁園がこの詞牌に挑戦したことも、篁園の填詞に對する強い意欲を推し量れる材料である。

また、注目すべきことは、篁園が姜白石の自度曲、「疎影」を三回も作っていたことである。この三首とも詠物詞で、そのうちの一首は姜白石と同じく詠梅詞である。これによって填詞において篁園はかなり姜白石を意識していた

と考えられる¹⁶。

四、填詞の手本としたもの

田能村竹田は日本初の填詞専門書『填詞圖譜』を著し、その「填詞總論」において、日本における詞作の少なさについて以下のように考察している。

……其の緣因を考えてるに三有り。一、詞句の作、短長多少の別有り、詩と比ぶるに非ず。二、作詞用韻、須らく平仄を工みにすべし、稍も差訛有れば、即ち笑柄と爲り。三、文人學子、眞に能く心を悉して研究する者極めて少し、此に因つて竟に缺如に付す¹⁷。

竹田は詞の作例が少ない原因を三つにまとめている。すなわち、その原因の第一は詞の句には長短の違いがあり、詩と同じようにはいかないこと。第二は作詞や韻を踏む時、平仄をきつちり合わせなければならず、少しでも間違つたら、笑い者になつてしまうこと。第三は文人たちの中では、本當に詞を細かく研究しているものは極めて少ないことの三點である。そこで、日本の詞はほぼなかつたと結論づけた。

こうした中で、竹田と同じ時代に生きた篁園は百六十六首の詞を作っており、異例とも言えるほどの質と量である。では、篁園はどのようにして詞を作ったのか。當時の江戸で填詞について指導できるほどの先賢がいた形跡は見受けられない。おそらく、篁園は當時見ることできた中國の詞書などを手本として自ら研鑽したものと思われる。

五山文學が榮えていた鎌倉時代末期から室町時代では、『花間集』や『東坡長短句』『中州樂府』など中國の文人の詞を収めた書籍がすでに日本の禪僧の間に讀まれていた。¹⁸⁾ また、填詞について言及した書物、たとえば『詩人玉屑』も五山版があり、江戸時代以前の漢文學者は填詞に對して一定の知識があつたといえるであろう。しかし、作品としては、龍山徳見(一二八四—一三五七)や中巖圓月(一二三〇—一三七五)のような元に渡つた僧侶がそれぞれ一首が残っているだけである。¹⁹⁾

江戸時代に入ると、まずは林羅山を始めとした林家一門が填詞に對して興味を示し、僅かながら詞の作品を作つた。林讀耕齋は『花間集』のために跋文を書き、林梅河は朱舜水に『花間集』と『草堂詩餘』について聞いた記録も残されている。²⁰⁾

(林梅河)問『花間集』及び『草堂詩餘』、凡そ近世の樂府、悉皆絲竹に協ふか?」

(朱舜水)答「樂府は固より絲竹に協ふ。『草堂詩餘』に陰陽平仄の譜有り、蓋し以つて絲竹に比えて之れを爲すなり。」²¹⁾

これによつて、當時の一部の漢學者が『花間集』や『草堂詩餘』などの書物に通して填詞に興味を持つていたことが明らかである。また、日本人にとつて、詞の音楽性は書物からだけではなかなか得られない情報であるので、一番氣になるところでもあつたことがわかる。

『花間集』や『草堂詩餘』などの書籍を讀んで、詞という文體に興味を持つようになるとしても、詞集や斷片な情報しかない詞話などだけで、日本人が填詞を試みるのは極めて難しかったであろう。實際、十八世紀中盤まで填詞を試みた漢學者は寥々たるものであつたのも、理由のないことではない。

ところが、中國では清代は「詞學の中興時代」と言われるように、詞譜、詞集、詞話など、詞に關する本が多く書かれた。それらの書物が日本に輸入されるようになると、

事情は大きく變化する。甲申（一七六四）年の朝鮮通信使李曦（一七一九—一七七七）は『海槎日記』の中で次のように述べている。

蓋し聞く、長崎島が通船した後、中國の文籍多く流入する者有り。其の中に志有る者は漸く文翰に趨き、戊辰（一七四八）の酬唱に比ぶれば頗る勝ると云ふ。⁽²²⁾

これは漢詩の唱和についての評價ではあるが、書物の輸入による日本漢學の飛躍的な成長は他國の人間から見ても確かなものとなっていた。これも一種の傍證になるであろう。

野村篁園の出身は下級旗本であるため、財力は甚だ乏しく、和刻本もなく、人氣があるとは言いがたい詞の關連書籍をたくさん手に入れるのは確かに難しかった。しかし、篁園は二十五歳の時に昌平坂學問所の試験に及第し、⁽²³⁾それ以降昌平坂學問所の藏書に觸れる環境ができた。特に主に五十歳以降の作品を収めていると思われる『秋篷笛譜』について、その頃の篁園はすでに儒者見習を経て儒者に進み、昌平坂學問所の書物を大量に借り出す資格を持っていた。「書籍借覽規例」（『日本教育史資料』卷七所收⁽²⁴⁾）には次

のような記録がある。

覺

御書籍拜借部數元定

御儒者十部 御役宅住居之者は十五部迄但五拾冊以上之品は貳部之積り百冊以上は三部之積候事

御達書之趣致承知候已上 古賀小太郎、野村兵藏、

杉原平助、佐藤捨藏

出役五部 御用見合の品は部數の外に候事但し前同斷

御達書之趣承知仕候 松崎滿太郎、新井忠次郎、鈴

木孫兵衛、松平謹次郎、小林榮太郎、友野權助、木村

金平、乙骨彦四郎

寄宿人頭取五部 寄宿人三部

御達書之趣承知仕候 岡本信太郎、平岡圓四郎、淺

井勇三郎

通稽古人二部

御達書之趣承知仕候通稽古人元極貳部拜借の處五拾冊以上貳部の積り相成候ては差支の筋御座候間可相成候はば通稽古人の方は是迄の通り相心得候様仕度奉存候

寅十月 世話心得井戸鐵太郎、同介奥村季五

郎、依田克之丞

調所出役貳部 但前同斷 組頭三部 勤番貳部 下番壹部 但し下番は五十冊以上の品兩度に拜借候事

書生寮 舎長五部 掛役四部 書生三部 但前同斷

右之通可相心候（寅十月）

〔追加〕御書籍宅下けの定

一 學問所出役は三部通稽古人世話役貳部同助壹部たるべく候事

一 調所出役は宅下け不相成候編集等の儀有之候節は伺の上別段たるべく候事

一 組頭貳部勤番は壹部下番は宅下け不相成候事

一 寄宿稽古人通稽古人とも會讀輪講等にて見合候品は申合にて兩三部も惣體の拜借に致し頭取世話役の者取扱候て不苦候

右之分は拜借部數の外に候事

この資料は天保十三年（二八四二）のもので、この時、篁園は六十八歳である。儒者の貸し出しのできる部數を明記しているため、當時儒者であった篁園は少なくとも十部の漢籍を同時に借り出したことがわかる。また、會讀輪講な

ど授業のために、それとは別に二三部を借り出すことも可能であり、篁園は昌平饗が所藏していた漢籍を十分に利用することができたことが分かる。

では、實際篁園が填詞にあたってどういふ書物を依據として使ったのであろうか。

まず、具體的にどのような詞の関連書籍が輸入されたのかについては、江戸期の唐船が持ってきた書物を調査した大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』によって、その概略を知ることができる。表三は、これに基づいて、唐船持渡書の中から詞と関連する書物を並べて、現在内閣文庫に收藏される書籍と『昌平志』卷四の「經籍志」と照らし合わせた結果を表示したものである。その中の多くの書物が昌平坂學問所に收藏されていたことが明らかである。

豊後佐伯藩主毛利高標獻上本は文政十年（二八二七）幕府に献上されたもので、その時篁園はまだ五十三歳であり、それらの書物を讀んだ可能性もあるので、昌平坂學問所舊藏本と併せておいた。また、紅葉山文庫も幕府の學者には貸し出しを許可している。篁園の詩友の一人である勝田半齋は當時まさに幕府の書物奉行であったので、便宜を計らってもらうこともあったであらう。

表三 江戸時代長崎から輸入された詞書と昌平黌の藏書（個人の詞集、全集を除く）

書名	内閣文庫所蔵	『昌平志』卷四「経籍誌」の記録（一八一八年）	長崎から輸入された記録のある年
冬白堂詞選	なし	なし	元禄七年（一六九四）
嘯餘譜	1. 明萬曆四十七年（一六一九）序刊本二（旧蔵林羅山、紅葉山文庫） 2. 清康熙元年（一六六二）序刊本一（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）	嘯餘譜一〇本	1. 元禄十五年（一七〇二） 2. 天保十一年（一八四〇）
花間集	明嘉慶刊本一（旧蔵昌平坂學問所）		享保十年（一七二五）
草堂詩餘	明刊本一（旧蔵昌平坂學問所）	草堂詩餘二本	1. 享保十三年（一七三三） 2. 寶曆四年（一七五四）
詞學全書	清乾隆十一年（一七四六）序刊本一（旧蔵昌平坂學問所）	詞學全書八本	1. 元禄七年（一六九四） 2. 享保二十年（一七三五） 3. 寶曆四年（一七五四）
詞苑叢談	寫本一（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）		寶曆四年（一七五四）
詩詞雜俎	明刊本一（旧蔵林羅山）	詩詞雜俎八本	1. 寶曆四年（一七五四） 2. 寶曆九年（一七五九）
詞綜	清刊本一（旧蔵林家（大學頭）	詞綜一二本	天明二年（一七八二）
詞律	清乾隆二十六年（一七六一）序刊本一（旧蔵昌平坂學問所）	詞律一〇本	1. 寶曆四年（一七五四） 2. 天明二年（一七八二）
宋名家詞	汲古閣明刊本二（豊後佐伯藩主毛利高標献上本一、紅葉山文庫旧蔵本一）		明和二年（一七六五）
詞潔	清刊本一（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）		1. 安永元年（一七七二） 2. 文化四年（一八〇七）
古今詞選	清康熙五十五（一七一六）年刊本二（旧蔵昌平坂學問所、豊後佐伯藩主毛利高標献上本）		1. 天明二年（一七八二） 2. 天明三年（一七八三）
古今詞話	清康熙二十二年刊本（豊後佐伯藩主毛利高標献上本）		天明二年（一七八二） 天明三年（一七八三）
詞苑英華	汲古閣明刊本一（旧蔵昌平坂學問所）	詞苑英華十六本	1. 天明二年（一七八二） 2. 天明三年（一七八三） 3. 寛政十一年（一七九九） 4. 寛政十二年（一八〇〇）
御選歷代詩餘	清刊本一（旧蔵昌平坂學問所）		天明二年（一七八二）
國朝詞雅	清嘉慶三年序刊本（旧蔵昌平坂學問所）		享和二年（一八〇二）
國朝詞綜	清刊本一（旧蔵昌平坂學問所）		
詞學叢書			嘉永元年（一八四八）

さらに、唐船持渡書以外に朝鮮から陸路輸送によつて入つてきた書籍や江戸以前から日本に輸入された書籍など他のルートを考えると、篁園はこれらの書籍以外にも多く讀んだであろうと考えられる。

たとえば、篁園の孫弟子にあたる浅野梅堂²⁶は『寒檠瓊綴』の中で、

詩餘ニハ歴代詩餘・昭代詞選・朱竹垞ノ詞綜・萬紅友詞律ナト填詞ノ便ニナル者ナリ

と記している。『昭代詞選』が幕府の學問所にあつたか否かは不明であるが、他の三部は確かに「經籍誌」に記録されている。この記述により、篁園を中心とする昌平黌一派の人々が讀んでいたことは確かであるばかりでなく、特にこれらの書物を重視していたことがわかる。

『歴代詩餘』は清の沈辰垣が康熙四十六年（一七〇七）に勅命を受けて編纂した詞集である。唐から明の詞を集め、凡そ千五百四十調、九千首あまり、百卷に分けられ、また詞人姓氏十卷と詞話十卷があり、全部合わせて百二十卷である。

『昭代詞選』は清の蔣重光が編纂した清人による清詞の

選集であり、順治から乾隆中期までの作品を収めている。全部で三十八卷がある。

『詞綜』は清の朱彝尊と汪森が編纂し、唐から金、元までの詞作を集め、宋と元人の評語をつけた詞集である。朱彝尊と汪森は浙西詞派の中心人物であり、『詞綜』も浙西詞派の主張を如實に反映し、姜白石と張炎、史達祖を極めて推尊し、多くの雅詞を選入した。

『詞律』は清の萬樹が撰した詞譜である。六百六十調千百八十體を収め、全部で二〇卷がある。萬樹は音楽に精通し、雜劇や傳奇を多く作つた。當時の詞律が亂れているのを正すために『詞律』を書き上げ、近代における一番信憑性高い詞譜として流通した。

以上をまとめてみると、篁園は唐代からその時代までのほぼ全世代にわたつてかなり豊富な詞の作品を見ることができたことがわかる。ところが、表三に示した通り、昌平坂學問所にはさらにこれ以外にも多くの詞書が所蔵されている。その中で浅野梅堂がこの四つをあげたのはやはり意味があると考えられる。この四つの詞書の中で、明確な流派の特徴を備えているのは『詞綜』を編纂した朱彝尊と汪森である。朱彝尊は「詞綜發凡」の中で次のように『草堂

詩餘』を批判している。

獨り『草堂詩餘』所收は最も下にして、最も傳わり、三百年來、學者はこれを守りて『兔園冊』と爲し、詞の不振に惑う無し。(中略)填詞の最も雅なるものは、石帚より過るもの無し。『草堂詩餘』は其の隻字を登せず、胡浩然の「立春」「吉席」の作、蜜殊の「詠桂」の章を見るに、しばしば亟しばしば卷中に收む、目無き者と謂うべきなり。²³⁾

『草堂詩餘』は明代に最も流行した詞の選本であるが、そもそも宋代の民間で活動してゐる説話の藝人、歌女や妓女のために編纂した通俗的な詞集であり、作品の文字や作者に誤りが多い。また時と場合による分類はされているが、しばしば原詞の意味を取違へることがある。それでも汎用性が高いことから、廣く流通したまでである。従つて、『草堂詩餘』は朱彝尊一派が求めている「雅」とはほど遠いものであつた。

篁園は、日下部夢香の詞集『查軒集』のために「序」を書き、次のように言つてゐる。

……『草堂』の陋習の多さを笑ひ、『蘭畹』の佳篇の少さを憾む。格を碧山に追ひ、蹤あとを白石に繼ぐ。²⁴⁾……

「草堂」はもちろん『草堂詩餘』を指している。「蘭畹」は南唐の詞集『蘭畹曲集』だが、今はすでに佚書になつてゐる。成立時代は『花間集』より少し遅いが、詞風は『花間集』と同じ系統である。「碧山」は南宋王沂孫の號で、「白石」は同じく南宋の姜白石を指している。二人とも雅詞派の代表的な人物である。篁園は『草堂詩餘』を批判し、『蘭畹曲集』のような花間詞風は良作が少なくと嘆いてゐる。篁園が理想としてゐるのは王沂孫や姜白石のような詞風である。前節にも言及したが、篁園が「疎影」という詞牌を三回も填詞したのはこのためだと考えられる。

淺野梅堂が『花間集』や『草堂詩餘』のような日本でも昔から多く流通してゐる書物をあげないのは、野村篁園を中心とする昌平黌一派の人々が朱彝尊一派の文學觀に影響されてゐるからだと考えられる。

なお、これらの書物には和刻本がないことから、廣く流通した書物とはいえない。日本における詞を作ることはあくまで少數人の間で流行してゐた趣味であることは明らかである。

五、題材と作られた場について

日本の和歌や俳句が歌會や句會などで、あるいは行游のときに作られることで「場の文學」と言われることがあるように、中國の詞もまた「場の文學」であり、詩と較べるとより強い社交性を持っている。しかも詞は樂曲が伴うことから、さらに「場」の意味が大きい。

日本では詞の作者が極めて少ないことから詞の音樂性も社交性も機能しているとは言いがたい。それにもかかわらず、篁園はなぜ「場の文學」である詞を多作することができたのだろうか。

詞が作られる「場」について考えてみると、まず三つに分類することができる。それは(一)宴席・行游のような集まりの中で。(二)贈答のような一對一の關係で。(三)獨詠のような一人でいる時である。以下は、篁園の詞のうち、詞題や内容から明確に判断できる作品をこの三つの状況に分類して舉げてみる。

(一)の場合に屬すると思われる作品 三十八首

○折桂令 夏日水陸別業招集

○滿江紅 初夏借遊谷墅二首

○水調歌頭中 秋梅巖蒼湖柱過、詞以誌喜。用坡老韻

○琵琶仙 聽清川道人彈琵琶

○滿庭芳 九日登高

○燭影搖紅 夢香書屋。詠芍藥花

○南歌子 夢香書屋雨集。分韻

○漁歌子 題清風閣。集句

○玉簾涼 夏日游墨水醜廟精舍

○臨江仙 五日窺綠閣招飲。分得真韻

○石湖仙 夏日遊筱池

○綠頭鴨 墨水秋遊

○邁陂塘 查軒招同翠巖練塘、遊墨水園德寺。席上分韻、各填此調。時仲商初九也

○念奴嬌 中秋翠巖查軒設舟過訪、同賦此調

○如此江山 晚秋遊蠶波村

○扁舟尋舊約 梅巖築舍鹿濱、邀予同賦、分得隨字

○醉江月 暮秋梅龕招同子遊鹿濱吟樂、各賦此解

○夢江南 秋日遊澗川二首

○行香子 梅花。同諸子賦

○魚游春水 暮春遊鹿濱吟舍。分韻

○酷相思 墨水春遊

○一剪梅 春日遊蟹村

○探春慢 除夜梅堂柱存同填此調

○百字謠 南鄰玉蘭盛開、乞一枝以插瓶、同查軒賦

○別銀燈 雨夕查軒柱存、同填此調。剪燈亭在鹿溪、查軒遊額處也

○拜星月慢 乙未閏七夕。同梅龔賦

○霜天曉角 仲秋念八、偕梅室重遊墨水園德精舍

○百字令 初冬同查軒遊梅林菴

○念奴橋 春日過子縵溪莊觀梅同查軒賦

○一萼紅 盆中牡丹著花、邀碧筠同賦

○鞞紅 牡丹盛放、同查軒崑岡裕堂分韻填此闕

○壺中天慢 清水谷園亭賞藤花

○定風波 秋晴分韻

○菩薩蠻 早春樂山堂看梅

○臨江仙 同查軒重過樂山堂賞梅、席上分韻、各填此闕

○蝶戀花 夢香書屋。詠白牡丹

(二) の場合に屬すると思われる作品 八首

○南鄉子 謝人贈枇杷

○百字令 危峰石。爲阿晴巖賦

○壺中天 秋盧畫扇。松陰索賦

○馬家春慢 述懷寄友

○春光好 詠子規。送人西征

○洞仙歌 夏夜。次龍舟韻

○傾杯樂 仲秋念七。對雪憶鹿溪。因賦此闕東查軒。併索和叶。

○疎影 爲吉田生題柳陰晚歸圖

(三) の場合に屬すると思われる作品 十三首

○沁園春 豫嘗愛穆田之勝、欲買一區以供娛老而未果、詞以誌憾

○祝英臺 近暮春書感

○愁春未醒 初夏偶述。適晴兒于役京城、故結末及之

○踏莎行 春日偶成

○風入松 夏日憶淨淥亭

○龍山會 重陽書感。適晴兒西役未歸

○醉蓬萊 人日偶成

○行香子 春日偶興

○鶯啼序 夏日園居雜述

○沁園春 夏日閑居

○鳳凰臺上憶吹簫 秋夕哭亡妹

○漁家傲 秋日書懷

○青玉案 暮春書感。用賀方回韻

詞作の数は、(一)の贈答の作が多く、詞題を見ると、「分韻」「各填此闕」「席上分韻」「同賦此闕」「各賦此解」「同填此調」など、明らかに詩(詞)會のような集まりの中で作られた詞が多くを占めることがわかる。また、詞題に同じ地名や名前が何回も出ることから、篁園は主に日下部夢香、友野霞舟、設樂翠巖そしてさらに數人の同好の士と集まって、頻繁に詞を作つて楽しんでたことが推測される。こうしてみると篁園が百六十六首もの詞を作ることができたのは、同じく填詞に興味を持ち、切磋琢磨する仲間がいたからであつたと考えられる。

さらに、これ以外の詞は、大部分が題畫詞と詠物詞である。それを次にあげる。

題畫詞 八首

- 點絳脣 題畫 江山晴雪圖
- 浪淘沙 題畫
- 蝶戀花 題美人撲蝶圖
- 漁家子 題畫
- 醉春風 題美人欠申圖

野村篁園の詞集『秋篷笛譜』について(陳)

○漁歌子題 江山晚眺圖二首

題畫詞の詞題のみで作品の作られた状況を判断することは難しいが、篁園自身が繪を描いていたという資料は見当たらないため、主に他人の繪畫作品のために作ったのではないかと考えられる。繪畫は詩(詞)會などの集まりで詩や詞のテーマとして用いられたり、または共に鑑賞を愉しむためのものとして出されたりすることが多かった。他に誰かに依頼されたり、同じ繪を見て詞を作る場合もあつただろう。

題畫詞以外に、残りほぼ詠物詞(七十六首・全體の五割弱)であり、篁園の作品の中心となるものである。詠物詞もいかなる場でも作り得る題材である。ただ何人かの文人が集まって詞を詠じる際に、題材として取り扱いやすいジャンルでもあつた。教師という篁園の身分から考えると、詠物は指導するにあたって比較的便利な教材であつたと考えられる。たとえば篁園と夢香は同じく紅梅を詠じた「一萼紅」、牽牛花を詠じた「惜秋華」、秋蝶を詠じた「永遇樂」などがある。篁園を中心とした同好の士は、定期的に集まり、極めて意識的に填詞を練習していたと思われる。

また、『篁園全集』の凡例に「漱芳詩社は毎月に一會、一年に十二會。其の題目は詠史詠物、見ざる所無し。先生は門弟子を教うるや周悉と謂うべし。家弟の澄は筵席の末に廁えて二十年なり。高什若干首を得て、靜宜集に載らざる者多ければ、則ち第十三卷と爲す³⁰⁾」とあり、これは詩社について言っているものであるが、詞の場合も同様の場面が十分想定できる。

おわりに

篁園は昌平坂學問所の教授であり、博く深い學問を以つて精力的にさまざまな文體に挑戦した。特に集唐詩や駢賦の多作は珍しい。填詞もそのうちの一つである。篁園は昌平臺の藏書を利用できる環境にあり、詞に關する書物や類書などを比較的容易に手に取ることができた。彼は宋人の作品を手本としながら、同時代の清朝の思想や書籍にも影響され、その理論を吸収して、自身の作品の糧とした。³¹⁾

野村篁園は一人の日本人として、なぜこれほど數多くの詞を作ったのか。その原因を考えるにあたり、無論、背景としての書物の輸入といった外部要素も重要ではあるが、主體的な要素にこそより注目する必要がある。同じ時代に

活躍した田能村竹田と比較してみると、彼は長崎に向いたこともなく、實際に中國人と唱和した形跡も見受けられない。篁園は純粹に文學と學問への探究心によって、書物を通して詞に觸れ、友人や弟子らと共に定期的な詩(詞)會の中で填詞の技術を磨き、遂に江戸時代の現存する詞の作品が最も多い作者となった。『秋篷笛譜』に收められている詞の量と質は篁園の勤勉で眞面目な爲人によるものであり、中國の文學やそれを生み出してきた詞人たちへの憧れがあった。結果的に日本填詞史全體から見て、高く評價すべき功績を上げられた人物であったといえるであろう。

注

(1) 現存する最古の作品は『經國集』に收められた嵯峨天皇の「雜言漁歌」と題された五首とされている。(神田喜一郎「填詞の濫觴」、『神田喜一郎全集』卷六所收、同朋舎、一九八五年)しかし、嵯峨天皇自身がこの作品を「詞」と意識して作っていたかどうか甚だ疑わしい。そもそも、手本となった張志和の「漁父歌」(『全唐詩』卷二十九)は中唐期のものであり、詞が文體として成熟する前の作品である。嵯峨天皇はおそらく「雜言」體の樂府詩として制作していただのではないか。

(2) 徳川光圀(二六二八—一七〇二)三十二首、頼杏坪(二七五六—一八三四)三十九首、野村篁園(二七七五—一八四三)百六十

六首、田能村竹田（二七七—一八三五）七十四首、友野霞舟（二七九—一八四九）三十六首、日下部夢香（？—一八六三）四十四首、神田喜二郎『日本填詞史話』上（『神田喜二郎全集』卷六所收、同朋舎、一九八五年）に基づいて整理した。

(3) 神田喜一郎『田能村竹田（一）』『田能村竹田（二）』『竹田の餘響』（『神田喜一郎全集』卷六、同朋舎、一九八五年）を参照。

(4) 篁園の傳記は、彼自身の自傳詩ともいえる「歲暮書懷」（『篁園全集』卷三）によってほぼ知ることができる。また、徳田武『野村篁園』（『江戸詩人選集』卷七所收、岩波書店、一九〇年）を参照。

(5) 詩については注（4）所引の徳田武『野村篁園』（『江戸詩人選集』卷七所收、岩波書店、一九九〇年）などがある。

(6) 『秋篷笛譜』は『篁園全集』の卷六から卷七に収められている。『篁園全集』は全二〇巻と三巻の目録があり、そのうち篁園自身が編纂したのは卷一から卷七までである。卷一から卷四は篁園の詩集であり、『靜宜慚藁』と名付けられている。卷五は篁園の集唐詩集であり、『採花集』と名付けられている。残りの卷八から卷二十は門人の石川澹が整理したものであり、各體裁の詩、序跋文、墓誌銘、散文と駢賦などが収められている。『篁園全集』は寫本のまま内閣文庫に收藏されており、刊行された形跡はない。他に、關西大學圖書館には卷一と卷二の寫本があり（未見）、國會圖書館には卷五から卷一九の寫本がある。本稿では篁園の作品はすべて内閣文庫本に據る。

野村篁園の詞集『秋篷笛譜』について（陳）

(7) 杜牧「晚泊」詩（『全唐詩』卷五百二十五）。

(8) 鄭谷「送史」（一作祠）部曹郎中免官南歸」詩（『全唐詩』卷一六七五）。

(9) 孫觀「張子爲園林八詠 其六 小蓮」詩（『全宋詩』、北京大學出版社、一九九一—一九九八年）。

(10) 嚴粲「風雨宿湖心」詩（四庫全書本『宋百家詩存』、卷三十三）。

(11) 趙汝鐸「聞舟中笛」詩（四庫全書本『宋百家詩存』、卷三十五）。

(12) 凌廷堪「梅邊吹笛譜自序」（『凌廷堪全集』第四冊、紀健生校點、黃山書社、二〇〇九年）。

(13) 大庭脩「江戸時代における唐船持渡書の研究」（關西大學東西學術研究所、一九六七年）に基づいて調べたところ、輸入された形跡は見受けられないが、朝鮮などから傳わった可能性も十分にあるだろう。

(14) これは詞牌の別名を全部まとめて一つの詞牌として數える場合である。

(15) 「鶯啼序」に關して、謝桃坊は『唐宋詞譜校正』（上海古籍出版社、二〇一二年）に次のように述べている。「此調爲詞體最長之調……（略）……因篇幅較長，處理四段之間詞意關係至爲重要，必須層次清楚，富於變化……（略）……此調結構與句式極複雜，除第三、四段兩個句群韻稀之外，其餘韻位適度，故調勢婉轉起伏，波瀾變化，時流暢，時低咽，而極爲和諧柔婉。此雖長調之最難者，但自來常有詞人試以展示詞藝之

- 水平。」
- (16) この點については稿を改めて論じたい。
- (17) 「……考其緣因有三。一、詞句之作、有短長多少之別、非比詩也。二、作詞用韻、須工平仄、稍有差訛、即爲笑柄。三、文人學子、眞能悉心研究者極少、因此竟付缺如。」(田能村竹田編、孫佩蘭參訂『填詞圖譜』、國學書局、一九一七年)。
- (18) 神田喜一郎『五山文學と填詞』(三)「(神田喜一郎全集)卷六、同朋舍、一九八五年)を參照。
- (19) 野川博之「五山二留學僧の填詞制作——龍山・中巖の木蘭花——」(『中國文學研究』二十五號、一九九九年)參照。
- (20) 神田喜一郎「林家一門と填詞」(『神田喜一郎全集』卷六、同朋舍、一九八五年)を參照。
- (21) 問「[花間集]及『草堂詩餘』、凡近世樂府、悉皆協於絲竹乎？」答「樂府固協絲竹、『草堂詩餘』有陰陽平仄之譜、蓋以比於絲竹而爲之也。」(朱舜水撰、馬浮編『朱舜水文集』、『朱舜水全集』所收、世界書局、一九六二年)。
- (22) 「蓋聞長崎島通船之後、中國文籍多有流入者、其中有志者漸趨文翰、比戊辰(一七四八)酬唱頗勝云。」(『海槎日記』六月十八日、『海行摺載』四所收、朝鮮古書刊行會、一九一四年)。
- (23) 「儒職歷任錄」、文部省編『日本教育史資料』卷七(文部大臣官房報告課、一九九二年)。
- (24) 同前注。
- (25) 寫本、國會圖書館所藏、一八一八年。
- (26) 淺野梅堂(一八一六—一八八〇)、名は長祚、字は胤卿、通稱金之丞。友野霞舟の門人で、いわゆる野村篁園の孫弟子にあたる人物。
- (27) 早稻田大學圖書館所藏、出版年不明。
- (28) 「獨『草堂詩餘』所收最下最傳、三百年來、學者守爲『兔園冊』、無惑乎詞之不振也。(中略)填詞最雅、無過石帚、『草堂詩餘』不登其隻字、見胡浩然「立春」、「吉席」之作、蜜殊「詠桂」之章、亟收卷中、可謂無目者也。」(朱彝尊、汪森編『詞綜』、上海古籍出版社、一九七八)。
- (29) 「……笑草堂之多陋習、憾蘭畹之少佳篇。追格於碧山、繼蹤於白石。……」(『篁園全集』卷十六)。
- (30) 「漱芳詩社每月一會、一年十二會、其題目詠史詠物、無所不見、先生教門弟子可謂周悉矣。家弟澄廬筵席末二十年矣、得高什若干首、靜宜集不載者多、則爲第十三卷」。
- (31) このことに關しては、また稿を改めて論じたいと考えている。

* * *

作者：陳 竺慧

Author : CHEN Chuhui

標題：關於野村篁園的詞集《秋篷笛譜》的初步探究

Title : NOMURA Koen 野村篁園's Book of Poems *Syūbo*

takifu 『秋篷笛譜』

摘要…野村篁園（一七七五—一八四三）是日本江戸時代の代表性詞人之一，在幕府最高學府昌平坂學問所執教多年，所留下的一百六十六首詞作全數收錄在其詞集《秋篷笛譜》之中。本論文對《秋篷笛譜》從書名由來、創作時期、所用詞牌、填詞時所參考的書籍、題材與其創作情境等進行了分析與考察。篁園的詞多數是在晚年與弟子們集會時所作，所用詞牌不拘長短而多樣，認同《詞綜》中以朱彝尊為首的浙西詞派之審美，以南宋詞人為範本進行創作，追求淡雅的境界。篁園利用學問所的藏書以及自己本身對文學與學問的追求，終能留下值得後世評價的佳作。

關鍵詞…野村篁園 秋篷笛譜 填詞 江戸時代 詞集